

この江戸時代（1603～1867 年）の茅葺き屋根の門は、阿弥陀寺境内にある建造物の中で最古の建造物です。13 世紀建立の元の仁王門は損壊しそのままになっていましたが、1685 年、地元の大名である毛利就信が、1 世紀以上前に損壊した門を再建しました。現在の門は、その前身である門と同じ設計とサイズで建てられています。門の名前は仁王（文字通り 2 人の王）から取られています。筋肉隆々の、恐怖感を抱かせる一対の守護神の仁王は門の両脇に立っています。（ここで、興味深いトリビアです。屋根の茅葺きの葺き替えは門の南側では 25 年おきに行われますが、日の当たりが少なく茅が湿ったままになる時間の長い北側では 10～15 年おきに行われます。）

金剛力士：2 人の怖そうな守護神

仁王（「2 人の王」）とも金剛力士（「力強いレスラー」）とも呼ばれるこの 2 人が寺の門に立ち、入り口を護っているのを見かけることも多いものです。伝統的には右の像は口を開いて「あ（阿）」と発声し、左の像は口を閉じて「うん（吽）」と発声しています。これはキリスト教の AΩ（アルファオメガ）のようなもので、調和と完全性を暗示しています。彫像は、寄木造と呼ばれる、複数の木を寄せ集め組み合わせる工法で造られており、木を合わせた部分が明らかで、そこには朱塗りの痕跡も残っています。職人技は卓越したもので、浮かび上がる静脈、盛り上がる胸郭、渦巻きのように体を包む裳、といった躍動感のあるディテールに、制作者である仏師、快慶らしさがよく表れています。高さ 2.7 メートル以上、重さ 340 キロもあるこの彫像は、鎌倉時代（1185～1333 年）の初期に建立されたものです。堂々とした彫像ですが、快慶が奈良の東大寺のために作った同様の守護神が 8 メートルを超える高さであることを考えれば、阿弥陀寺の仁王像は控えめな方だといえます。